

社会正義につくした発達心理学者 田中昌人

伊藤武彦

田中昌人略歴

- 1932 年 東京に生まれる
- 1954 年 京都大学教育学部卒業（教育心理学）
- 1954 年 京都大学教育学部助手
- 1956 年 滋賀県立大津市立南郷中学校 近江学園分校教諭
- 1964 年 滋賀県立近江学園指導係長
- 1970 年 京都大学助教授
- 1983 年 京都大学教授
- 1995 年 京都大学を定年退官、京都大学名誉教授
- 1996 年 龍谷大学教授
- 2005 年 永眠

〔1〕田中昌人の発達保障理論の成立

田中昌人の子ども時代

田中昌人は1932年に東京で生まれ、7歳までは長野の松本で暮らした。彼は体が弱く、泣き虫でひとりぼっち、という子どもであった（田中, 2002）。よく学校に欠席し、教師から質問されても答えられずに泣いてばかりいた。それで教科書を読む順番をとばされたりした。3年生の時、担任から特殊学級に移ってはどうかと勧められた。この直後、1941年に田中家は四国の徳島に移り、小学校4年生として転校した。

暖かい気候のためか健康を回復し、友達もできた。7歳という発達の質的転換の時期に毎日の小さな冒険が彼の頭と心と体を解放したという（田中, 2002）。

田中昌人の子ども時代と15年戦争

田中の子ども時代は満州事変・日中戦争という中国との戦争、1941年のからの米国を元とする連合国との第二次世界大戦の時期と重なっている。戦争の末期には、彼は岡山に学童疎開した。敗戦後には、田中は、塩作りの手伝い、野菜作り、漁師の手伝い、毎朝の新聞配達などで働きながら勉強した。1950年に京都大学教育学部に入學して、教育心理学を専攻した。戦中の軍国主義から戦後の民主主義と学問の自由へと、劇的な社会変化を経験している。

1952年の田中昌人と糸賀一雄の近江学園での出会い

糸賀一雄は精神薄弱者のための教育施設である近江学園の創業者であり園長であった。糸賀は、障害児は社会の無用者ではない。彼らこそが教師と大人に教育とは何かを教えてくれる。「この子らに世の光を出なく、この子らを世の光に」と社会に訴えた人物である。田中はまた、非行少年少女達の矯正院にも、社会生活に適応できず犯罪をおかしてしまっている病気や障害をもった子ども達に出会った。田中は自分のノートに「…これらの子ども達は人間の欠陥ではない」「すべての人間は人間らしく扱われなければならない。」(田中, 2005) 貧乏ではあったが、学問の自由を享受し教育による民主日本の再生のために学んでいたのであった。

田中昌人の卒業論文

田中の卒業論文(田中, 1954, 田中1996に再録)は、母子保健についてであり、2つの部分からなっていた。ひとつには、妊娠中毒症が知的障害の原因となるという俗説を批判することになる、周産期と後の精神発達との関係のきょうだいとの対比較による実証的研究であった。これは、妊娠中毒症が知的障害を引き起こすという俗説の反証となり、妊娠中毒症という疾病に対する言われ無き偏見への反論であった。この研究は、後の近江学園で働くことをへて発達保障理論の形成に結びついた。

もうひとつは、京都大学附属図書館にあった「富士川文庫」の史料を利用した「胎教」についての歴史的な展望論文であった。この計画は指導教員である正木正教授を不快にさせた。しかし卒業論文の口頭試問の後、正木教授は田中のほうに歩み寄りこう言った。「私は、あなたがまじ

めに教育心理学に取り組んでいないのではないかと初めは疑っていました。しかし今、私はあなたに謝らなければなりません。…教育心理学者はなかなか社会歴史的な研究を行いません。人間の成長の研究は、自然科学的研究と社会歴史的な研究が両方必要です。私はあなたが両方の方法論をマスターして教育的知見を積み重ねていくように期待します。」田中はこの教えの通りの人生を歩んだ。このはげましは、田中の諸研究として後に実現したのである。

田中の母子保健調査研究は、すぐに学会で発表された。彼の歴史研究は1957年に『教育學研究』に発表された。1954年に卒業後、田中は教育学部の助手として京都大学に2年間勤めた(田中, 2006)。その後1956年から糸賀一雄のいる近江学園に移り、精神薄弱児の発達と教育を中心に1970年まで研究を続けることになる。発達保障理論が確立したのはこの頃のことである。

障害児研究と心理学研究における構造的暴力との闘い

田中の研究は健常児と障害児の観察に基礎をおいていた。かれの近江学園での職務は教育カリキュラムの作成であった。後に田中は、彼の独自の発達理論「階層一段階理論」を構築することになる。田中は障害児の劣等性に焦点を当てた従来の障害児研究を激しく方法論的に批判した。そのような諸研究の結果は、障害児の劣等性の結果の積み上げであり、教育の困難性・不可能性を示唆するものとなっていた。そのような類型論的な研究は、障害の程度によって教育の権利を奪っていくことに寄与してきたかもしれなかった(田中, 1966)のである。

田中昌人たちは、健常児と障害児に共通する人間発達の筋道に根ざした障害児の「教育可能性」を強調した。田中は、障害者を社会の重荷としてではなく、教育権の主体者とする、研究者の見方のパラダイム転換をめざした。これは、彼が平和と社会正義の文化を促進する最初の段階であった。

田中昌人らは全国障害者問題研究会(全障研)を組織して、初代委員長となり、障害者の人間としての権利とりわけ教育の権利を実現し発展させることをめざした。全障研は研究者や教育者や親からなる民間研究団体である。全障研の理論は発達保障理論と呼ばれている。田中昌人は1973年に3分冊の『講座：発達保障への道』を執筆した。そこでは3つ

の系の統合すなわち、(1) 個人の発達の系、(2) 集団の発展の系、(3) 社会の進歩の系の統合の重要性が述べられている。

〔2〕田中の発達とエンパワメントについての10の中心的な考え

1996年の著作(田中, 1996)で、田中は、発達研究・教育研究に必要な10のポイントを書いている。これを筆者なりに咀嚼し、以下にその概要を述べる。

① 差別を許さない

田中は、健常児と障害児の差異を強調する固定的な研究を「類型論的研究」の誤りとして批判した。そうではなく、彼が提案し、実践したのは、障害児も発達の共通の筋道を歩むとして、教育的・発達の課題を発見したことであった。田中はすべての子ども達に共通の発達の筋道を強調した。

② 「手と手を取りあって」個人主義的競争でなく協同的な前進を

田中(1966)は、同時代の日本の社会が生徒同士が敵対的な競争関係を持ち、まずしい「交換性」すなわち生徒同士の相互作用の貧困さをもたらした、日本の教育の現状とその考え方を批判した。各々の発達段階での自己実現が、社会的効率性や能力主義より重要だとした。

③ 進歩と退却とジグザグからの教訓

田中はすべてのプロセスにおいて価値と意味を見いだそうとした。教育的で形成的な評価が、結果や影響だけでなくその過程において成されなければならないとした。田中は「問題行動」を発達要求として、さらなる発達へのきっかけとしてとらえることを『講座:発達保障への道』のなかで提起した(田中, 1974)。「子どもの困難な行動の観察を通して、子どもの発達要求を発見することが重要である」。彼は、子どもの困った行動を、発達の最近接領域(ヴィゴツキー, 1962)として将来への発達への可能領域としてみることを推奨した。個人においても集団においてもそのエンパワメントの過程の評価において、田中の提案は今日の「エンパワメント評価」(Fetterman & Wandersman, 2005; 伊藤, 2007)、と通じるところがある。

④ 科学と実践の達成の蓄積を共通の宝にする

科学と実践の果実は少数の特定者に占有されてはならない。田中昌人達は、大津方式という発達診断システムを地域の保健所を基盤にして打ち立てた。このシステムは他の地方自治体にも推薦され普及した。人間発達についての科学的知見と彼の理論により、田中は数多くの写真入りの著書を書き、専門家と一般の人のために、子どもの発達と診断に関する多くのスライドや映画やビデオを監修した。

⑤ 協同に基づきながら自発的な問いかけと深い思考を

田中は教え子にとっても良い教員であった。2005年に死去した後（遺言により田中の死去は1ヶ月間伏せられた）、教え子達が中心になって、偲ぶ会を開催した（田中昌人先生を偲ぶ教え子のつどい実行委員会2006, 2007）。2007年の本では、41名の田中指導生が追悼文を寄せている。田中昌人は、彼らの研究と人生を決定するような、情熱的な研究者であり教師であったことが記されている。

⑥ 能力の系統的、多面的、総合的生成

田中の発達保障理論は個人の系と集団組織の系と社会の系の3つの系における系統的組織的なものである。田中の個人発達理論は身体と認知と情動と対人関係の領域を含みそれらを統一している。彼の理論は包括的である。Piagetが自分の構造理論によって認知発達の全領域を説明しようと試みたように、田中は、単純な法則性のセットによる自分の構造理論により、初期の人間発達の全領域の説明を試みたのである。

⑦ 人格と結合した諸能力の連関と発展をもとに生きて働く力の高次化をはかる（高得点低学力であったり、深く幅広い人格の形成と結んでいない諸能力になるのではなく）

人間の人格発達は労働する力と結びつけられなくてはならない。低学力であるにもかかわらず、高い得点を与えるような教育は避けるべきである。人間の能力は深く広い人格発達と結びつけて発達するべきである。

⑧ 発達の科学的認識こそ実践の基礎となるべきである。

表面的・機械的な発達の見方と戦うべきである。不可知論に陥ったり、

発達の法則を軽視したりすることと戦うべきである。発達の段階を促進することを差別とみなすような非科学的な理論と闘うべきである。

⑨ 3つの系の統一的把握

個人の成長の系と、集団組織の発展の系と、社会的政治的進歩の3つの系が結合されるべきである。田中はこう言っている。人間発達は個人の社会化ではない。個人の要求のシステムは現象的に社会的集団に依存する。その意味において、人間発達は、集団主義的な見方から認識されなければならない(田中、1966)。彼の教育観はメンタルヘルスにおける「生物心理社会的モデル」(Engel, 1977)に対応している。

「集団主義はしたがって個人が社会化していく途中で集団が必要になってくるとして考えられているものではありません。現象的集団の中になくても「要求のシステム」というかかわりかたは社会的存在様式であるかぎり存在するのです。その意味では生まれる前から集団主義的に認識しなければならないのが人間の発達なのです。」(田中 1966)

「自然的不平等の容認にもとづく権利の反対物への転化に、歯止めをしていく新しい権利創造のたたかいが必要になる。それが発達権をかちとるたたかいである。こうしてかれらの権利が保障されていく運動の中でのみ、精神薄弱児に権利の主体をおいた研究は成立する」(田中1966)。

⑩ 人権としての発達保障の権利

発達保障の権利は平和的で民主的な社会を建設する過程のなかで達成することが出来る。第一世代と第二世代と第三世代が考慮されなくてはいけない。

[3] 結論：田中昌人は発達心理学者として発達保障とエンパワメントと平和と社会正義のために闘った。

田中昌人は統一された理論をつくった。彼の発達保障理論には2つの構成要素がある。1つは個人発達の理論である(荒木, 2004)。もう1つの構成要素は3つ系に基礎をおいた社会正義のための心理学理論である。本論文は後者を扱った。発達保障理論の考えはガルトゥングの構造的暴力の論文(Galtung, 1964)に対応している。ガルトゥングは、人間の発達可能性と実際の発達の間ギャップを人工的に生み出すこととして暴力

を定義した。

田中（2001）は、自分の理論的枠組みから地球的規模の問題に幅広く取り組んだ。この論文は地球的問題である、人口過剰、資源の枯渇、環境破壊、貧困問題などを扱っている。彼は生産労働をとおして人間的価値を創造することにより人間の欠乏と貧困を克服してきた人類史を把握することを提案し、応用心理学は研究を通してそのような問題を説明し解決する責任がある、と主張している。基本的原則として、（１）共同の進化のメカニズムを妨害することなく、（２）生成的力に立脚した資源の利用に焦点を当てた循環システムを建設し、（３）民主的自律性と連帯と協働を通して平和と安全と人間発達の保障を実現すること、の３つを上げている。彼は、国際連合と人民の連帯の重要性を強調した。この論文は、執筆計画中の著作『発達保障の前提と21世紀の発達研究の挑戦』の一部となる予定であったが、本は、完成されなかった。地球問題への理論の拡張の途中で、田中昌人は、2005年に享年73歳で死去した。田中は、15冊以上の単行本、何百本もの論文・記事を書き、子どもの発達についての4つの映画と5つのスライドシリーズと17のビデオを監修した。

参考文献（日本語文献で参考にしたもの）

荒木穂積（2004）障害児の発達という現実に向かう心理学：発達保障と心理学 現実に向かう心理学『現代のエスプリ』, 449, 100～110.

加藤直樹（2004）「発達の3つの系と集団」『人間発達研究所通信』, 20(3), 37-43.

田中昌人（1966）「発達保障の源流」（『人間発達研究所研究所紀要』創刊号 1987に再録）

田中昌人（1968）『「精神薄弱児」研究の方法論的検討』心身障害者福祉問題総合研究所、大木会、1968年

田中昌人（1974）（2006復刻）『講座：発達保障への道』（全3冊）全国障害者問題研究会

田中昌人（1996）『発達研究への志 あいゆうびい』（移動大学出版会）、萌文社（発売）

田中昌人（2001）「平和・安全・発達保障の応用心理学を目指して：2050

年迄の応用心理学の前提と課題に関するミレニアム考」『応用心理学研究』27(2), 1～16.

田中昌人 (2002) 発達土割 京都大学教育学部第二期生有志 (編)『あの頃の子どもたち：五十年後から見た戦中戦後の教育体験』クリエイツかもがわ pp. 53-78.

田中昌人 (2003)『障害のある人びとと創る人間教育』大月書店

田中昌人 (2005) 荒地の緑 京都大学教育学部第二期生有志 (編)『あの頃の大学生たち：戦後激動の「改革期」を生きる』クリエイツかもがわ pp. 25-68.

田中昌人 (2006) 土入れと、麦踏みと、京都大学教育学部第二期生有志 (編)『あの頃の若き旅立ち：教育・研究・生活』クリエイツかもがわ pp. 79-114.

田中昌人先生を偲ぶ教え子のつどい実行委員会 (編)『土割の刻：田中昌人の研究を引き継ぐ』クリエイツかもがわ

田中真介 (2006)「追悼 田中昌人教授：平和・安全・発達保障の学問への志」『応用心理学研究』32(1), 47～52.

* 本論文の一部は、2006年9月の日本応用心理学会第73回大会でのシンポジウムの報告として、「田中昌人の発達理論：コミュニティ心理学の立場から」と題して発表された。また、2007年の6月にインドネシアのスラカルタ市で開かれた第10回国際平和心理学研究シンポジウムで発表された。英文を日本語訳する過程の中で表現・内容を少し変えたところがある。文献も、日本語のものを示した。